慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	2019年度三田史学会大会総合部会シンポジウム報告：人間の心性・身体性の歴史を考える：古代・中世を中心として：コメント3：脱・人間中心主義の環境史
Sub Title	Symposium at the 2019 annual meeting : considering the history of human mentalities and body : focus on the ancient and medieval times : comment 3 : environmental history beyond anthropocentrism
Author	佐藤, 孝雄(Satō, Takao)
Publisher	三田史学会
Publication year	2020
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.89, No.1/2 (2020. 10) ,p.147(147)- 155(155)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20201000-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シンポジウム「人間の心性・身体性の歴史を考える――古代・中世を中心として――」

コメント3：脱・人間中心主義の環境史

佐藤孝雄

緒言

二〇一九年度の三田史学会大会では、日本史・東洋史・西洋史・民族学考古学からなる慶應義塾大学文学部史学系四専攻の部会に引き続き、講演会が開催された。『人間の心性・身体性の歴史を考える―古代・中世を中心として―』と題し、演者に三宅和朗氏（慶應義塾大学名誉教授）と大喜直彦氏（山形大学教育文化学部教授）、コメンテイターに桐本東太氏（慶應義塾大学文学部教授）、赤江雄一氏（同准教授）を迎え開催された同講演会の内容は、専門性を超え多くの聴衆の興味・関心を惹きつけるものであったと思う。分けても、「日本古代の心性史と環境史」と題された三宅氏の講演は、環境考古学の一翼をなす動物考古学を専門とする筆者にとって有益かつ刺激的であった。講演会の終了間際、司会を務められた中島圭一氏（同教授）に促され、筆者も少しばかり発言の機会を得た。小稿では主に三宅氏の講演を振り返る中、その折意を尽せなかった発言の趣旨も補い、本講演会に対する感想を述べたい。

環境史の特質と射程

本誌にその内容が掲載されているため詳述を避けるが、氏の講演は、まず環境史が「人間が関わるもの、人間に影響を及ぼすものすべて」（三宅 2019: 1）を対象とする学問に他ならず、その形成期より一貫して文理融合を志向する研究分野として発展してきたことの確認から説き起こされた。実際、この点は環境史家を標榜する研究者

が一致して認めるところであろう。いみじくもこの分野の先駆者として名高いジョン・マクニールも「凡そ環境史ほどに学際的な知的活動はない」と指摘する（McNeill 2003: 9）。

環境史について語る際、その発展が狭義の歴史家すなわち文献史学者以外によって主導されてきたことにも言及しておくべきだろう。コメンテイターの一人赤江氏も紹介されたドナルド・ヒューズは、この分野に関するとりわけ優れた書物が地理学者や生態学者など歴史学以外を専門とする研究者によって記されてきたと主張する（ヒューズ 2018: 108）。ヒューズはさらに、「人間と自然のどちらの方がより支配的か、より影響力があったかの判断は、環境史家の間でも大きく異なり、実際、両極の間に様々な立場が連なっている」とも指摘。環境決定論的な視点に立つ最たる研究者として『銃・病原菌・鉄』、『文明崩壊』等の著者として名高いジャレド・ダイアモンドを、対照的に文化決定論的視点に立つ代表者に『変貌する大地』等の著作で知られるウィリアム・クロノンを挙げた（ヒューズ 2018: 111）。ともに環境史家を標榜する両者の視座に見る隔たりが決して小さくないことは、それぞれの著作を読まれた向きが一様に首肯されるに違いない（e.g. ダイアモンド 2000・2005、クロノン 1995）。

残念ながら、三宅氏による講演の冒頭「環境史とは何か?」と題されたパートで、こうした環境史の歩みと研究視座の多様性が詳述されることはなかった。それでも、環境史が一般に人間と自然の相互作用、人の営為と自然の営力が絡み合う歴史を探求する学際的分野であることは、聴衆にも十分共有されたものと思量する。

「環境への心性史」とその広がり

続く第二パート「ユクスキュルの環世界説」で、三宅氏は、ドイツ人生物学者、ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの「環世界説」を紹介し（ユクスキュル／クリサート 2005）、これを受け継ぐ動物行動学者、日高敏隆氏（2007: 151-6）が人間に特有なものとした概念による「イリュージョン」（死・文化など）を扱う分野が、「環境への心性史」であると定義された。さらに「環境への心性史の広がり」と題された第三パートにおいて、氏は、ユクスキュルの「環世界説」を直接環境史や歴史学に引きつけた先行研究こそ見受けられないものの、「環境への心性史」を意識させる論考が文献史学、考古学、歴史地理学、国文学、音楽学、美術史学など人文学の諸分野に

少なからず見出せると指摘。それだけに、環境史の一翼をなす「環境への心性史」に関する研究には、一般に文系もしくは人文社会学として括られる諸学問の融合が可能かつ必要となることも強調し講演を結ばれた。

もとより、三宅氏のいう「環境への心性史」も、環境史の一翼をなす分野に位置づけられることは論をまたない。環境思想史研究の先駆者の一人として著名なドナルド・ウースターも、「環境史する」と題した論考の中、（一）過去の自然そのもの、（二）人間の経済活動や社会の組織化、それらが環境に及ぼす様々な影響、（三）人間やその社会が自然に対して抱く考え方、思想、感情などを対象とする探求が環境史への理解を深めるために必要となることを説いている（Worster 1988: 293）。三宅氏の「環境への心性史」はウースターのいう第三の探求に含まれ、前二者を扱う研究以上に、人文科学の諸領域が果たす役割が大きい知的作業に他ならない。

考古学者の端くれである筆者が、小稿で触れておくべきは、三宅氏が「環境への心性史」が意識された考古学的研究の一例として、桜井準也の研究を紹介されたことであろう。桜井は「遺跡や遺物が本来の目的で使用されなくなった後世の時代において（中略）どのように認識され、利用されてきたか」（桜井 2011: 8）という問題に目を向けた。彼自身も回顧した通り（桜井 2011: 18–9）、こうした研究は、「モノの領有／流用 appropriation」という問題が意識される中、一九九〇年代の後半から、欧米で先行的に行われるようになった（e.g. Bradley and Williams eds. 1998）。もっとも、その背後には、一九六〇年代から八〇年代にかけての考古理論の基盤をめぐる論争も経て発達をみた認知考古学の潮流があったことも見落とすべきでなかろう。

既存の文化史考古学を脱すべく、機能主義と生態史観にも立脚、客観的かつ実証的な過去の説明を目指した研究者達によって一九七〇年代を中心に発展を遂げたプロセス考古学。かたや、構造主義的視座にたち、適応や経済効率が偏重されるきらいにあるプロセス考古学を批判、八〇年代の後半から意味や象徴に目を向け、解釈学的な過去の説明を志向する研究者らによって主導されたポスト・プロセス考古学。今日そのどちらに軸足を置く研究者達もが関与する認知考古学は、心理学とも適宜協業を図りつつ、ヒトの心の普遍的進化や過去の人々の多様な心性に迫る分野と位置づけられる（cf. レンフルー 2008、Henley, Rossano and Kardas eds. 2019）。おそらく、国

外にも目を転じたなら、この認知考古学に位置づけられる研究に、三宅のいう「環境への心性史」に関わるそれが枚挙に暇がないほど見出せるに違いない。

過去二〇年の考古学

改めて指摘するまでもなく、考古学の思想潮流も文化人類学や社会学ひいては哲学とも不可分の関係にある。実際、上記した認知考古学は哲学の主要分野の一つ認識論とも分かち難く結びついている。もっとも、三宅のいう「環境への心性史」に関わる考古学的研究は、認識論と並ぶ哲学のもう一つの主要分野たる存在論の潮流を意識するそれにも見られることも指摘しておく必要があろう。

しばしば他の諸学から借用するだけで独自の理論を生み出さないと揶揄される考古学は、実際、機能・構造主義に刺激を受けた後も様々な思潮を貪欲に取り入れてきた（cf. Hodder ed. 2012b、Urban and Schortman 2019）。八〇年代に台頭したポスト・プロセス考古学派の研究者達は、次第に意味や象徴という初期の関心を離れ、九〇年代以降エドワード・サイード らに端を発するポスト・コロニアル理論（e.g. サイード 1986）やフェミニズム論、ジェンダー論などを引き寄せ、権力やアイデンティティなどに目を向けるようになった。

しかしながら、特に今世紀に入ってからの考古学理論は、どちらかと言えば認識論と結びつくそうした研究以上に、自身を取り巻く多様なモノや生物との関係性、すなわちエトムント・フッサール、マルティン・ハイデガーやモーリス・メルロ＝ポンティらの現象学にも淵源を持つ存在論に影響を受けた研究によって展開されてきたと言っても過言でない。オリバー・ハリスとクレイグ・チポラもその点を認め、『新千年紀の考古学』と題する近刊書の中、現象学、エイジェンシー論、対称性思考 Symmetrical Thought、新唯物論 New Materialism に立脚する研究の紹介に多くの頁を割いている（Harris and Cipolla 2017）。

周知の通り、モノが有するエイジェンシーという考え方は、文化人類学者のアルフレッド・ジェルによっていち早く説かれ（Gell 1988）、「アクター・ネットワーク・セオリー」を提唱したブルーノ・ラトゥールによって発展を遂げた。ラトゥールはモノが単に人の従属物ではなく、人の活動・行為に影響を及ぼすアクタントともなることを説いた（ラトゥール 2019）。また、ヒトとモノを

対等視する彼は、それに先立つ代表作 *Nous n,avons ja-mais été modernes*（英訳 *We Have Never Been Modern*、邦訳『虚構の近代』）で「対称性人類学」を謳い、西洋近代科学を支配してきた人とモノ／生物、文化／社会と自然、主体と客体といった二元論の脱却に挑んだことでも知られる（ラトゥール 2008）。考古学者に限らず、今世紀に入って二〇年、このラトゥールに影響を受けた研究者は国内外枚挙に暇がない。国内では文字通り『対称性人類学』（中沢 2004）と題する著作を著した宗教史学者、中沢新一もその一人に挙げられよう。また、国外では英国の社会人類学者ティム・インゴルドもラトゥールに触発を受けた研究者に他ならない。

インゴルドは近著『メイキング』の中、人・モノ・生物との対称的な関係性を、家屋を例に示している（インゴルド 2017）。彼は問う。家屋は単に人の製作物と言えるのかと。もとより西洋近代思想において伝統的に家は人が設計・建築する点で、動物に住処を与える樹木や動物が作る巣などと明確に区別されてきた。しかしながら、自然と文化の二分法を離れて考え始めると、そうした区別に疑問を抱かざるを得なくなる。家屋の建材となる樹木は多くの生き物の住処ともなる。キツネは根元に巣穴を掘り、キツツキは樹洞に巣を営み、リスは枝の上を駆け回り、昆虫は樹幹の中に卵を生みつける。樹木の形はそれら生き物によって何年もかけて形作られ、さらに陽光や風、気候などにも左右される。つまり樹木はその遺伝形質のみを示すわけではなく、むしろ他の生き物達や自然現象との関係性の中で成長し、この世界に立ち現れる。その観点に立つなら、樹木を建材とする家屋の製作者も人だけに求められなくなることをインゴルドは示した。さらに、家屋等が人によって廃棄された後も形を変えながら世界の中に存在し続ける点にも鑑み、彼は作るという行為を完成のない成長の過程と捉え、この世界に形なすものが人・モノ・生物の対称的な関係性、「メッシュワーク meshwork」の中にあり、すべからく「万物照応 correspondence」の所産であるとも説く。モノが存在するとは如何なることかをラトゥール以上に掘り下げようとするインゴルドらの研究は、「世界内存在 in-der-Welt-sein」の概念を説くハイデガーの現象論からも着想を得ており、近年、新唯物論 New Materialism とも呼ばれている。

欧米の考古学者達は、九〇年代の中頃より、上述のラトゥールやインゴルドの研究に関心を示し、二〇〇〇年

代以降、盛んに自身の研究に引き寄せるようになった(e.g. Lindstrøm 2015、Olsen 2003, 2007, 2012、Olsen *et al.* 2012、Olsen and Webmore 2015、Webmore and Witmore 2008、Witmore 2007, 2014)。ポスト・プロセス考古学を主導した著名な理論考古学者、イアン・ホダーもそうした研究者の一人に位置づけられよう。

彼は影響し影響され合うと人とモノとの関係を「絡み合い entanglement」と称し、トルコ新石器時代のテル、チャタル・ヒュユクの住居址の建築法に見る変遷にその実例を読み解いて見せた(Hodder 2012)。ホダーは、大半が暦年代で七千年〜六千四百年前の時期に属すこの遺跡の住居址の壁に全て粘土が用いられていたことに着目。粘土の物質的特性と付き合う中、如何に往時の人々が周囲の生物やモノとの関係性に取り込まれていたったかを明らかにした。すなわち、膨張・収縮し崩れ易い粘土で壁を築くために、人々は壁を柱で支え、継続的に壁の漆喰も塗り替えなければならなかった。柱材を得るために伐採が繰り返され、周囲の景観から樹木が消えてゆくと、人々はより厚い壁を作る必要性からより深い地層に産する性質の異なる粘土まで掘削する必要性に迫られた。ところが、その粘土が以前のものより砂質であったため、新たにこれを利用すべくより多くの時間と労力を要する複雑な技術が生み出さなければならなくなった。かかるプロセスを示し、ホダーは、粘土で家屋の壁を作ると決めたことから、いかにしてこの遺跡の形成者達が周囲のマテリアリティに捕らえられていったかを鮮やかに描き出した。対称性考古学者もしくは新唯物論者と括られることに本人は少なからず抵抗を示していると聞くが(Harris and Cipolla 2017: 147–148)、ホダーの「絡み合い」は、明らかにラトゥールの「ネットワーク」、さらにはインゴルドの「メッシュワーク」とも通底する概念と言える。

結言：脱・人間中心主義の環境史

過去二〇年間、考古学でも盛んに引用されるようになったラトゥールやインゴルド。彼らは、ともに西洋近代科学を支配してきた人とモノ／生物、文化／社会と自然、主体と客体を分かつデカルト的二元論、言い換えれば人間中心主義からの脱却を目指している。そして今日、存在論的転回に根ざすこうした研究は、哲学、文化人類学、社会人類学、考古学のみならず、人文社会科学に属する多くの分野で中核を占めるように至っている。それだけ

に人の心性・身体性の歴史をテーマに開催された本講演会で、二元論や人間中心主義から離れ、今後如何なる研究が可能かつ必要となるのかという点への言及や提言がいずれの登壇者からも聞かれなかったことは、些か残念でならない。

自明のことながら、西洋近代科学を支配してきた二元論・人間中心主義は、ギリシア哲学と一神教的世界観に根差す。それゆえ、欧米の研究者には、近年、多神教的世界観と異なる哲学が育まれた非西欧社会の思考法を以前にもまして真剣に探求しようとする機運も高まっている。また先に紹介した中沢新一は、「大宗教にあってただ一人、野生の思考の共通基盤に立つ対称性の思考の可能性を最後の帰結にまで発達させるという試みに挑戦してきた」のは仏教だとも説く（中沢 2004: 163-164）。その仏教思想にも育まれた我が国の古代・中世人の心性史を解明するには、今後ますます脱・人間中心主義的視座に立つ研究が必要となるのではなかろうか。

かくいう筆者も過去一〇年間、対称性思考や新唯物論も意識し、折に触れ人とそれを取り巻く多様な生物のいずれを主体・客体とすることなく歴史を描く必要性を指摘してきたが（佐藤 2010, 2018）、未だ満足に研究の実践例を示せていない。それだけに、本講演会の登壇者諸氏はもとより人文社会科学・自然科学の枠を超え多くの研究者と対話や議論を重ねたいと思う。本小稿がその糸口となればこれに勝る喜びはない。

文献

〈邦文〉

インゴルド T.［金子遊・水野友美子・小林耕二訳］（2017）『メイキング―人類学・考古学・芸術・建築―』東京：左右社

クロノン W.［佐野敏行・藤田真理子訳］（1995）『変貌する大地―インディアンと植民者の環境史―』東京：勁草書房

サイード E. W.［今沢紀子訳］（1986）『オリエンタリズム』東京：平凡社

桜井準也（2011）『歴史に語られた遺跡・遺物―認識と利用の系譜―』東京：慶應義塾大学出版会

佐藤孝雄（2010）「人と自然の糾う歴史―動物考古学発展の鍵―」『三色旗』747号 8-15頁

佐藤孝雄（2018a）「北海道に探る多種共存の糸口」『BIOSTORY』30号 8-11頁

佐藤孝雄（2018b）「絡み合う人とオオワシ」『BIOSTORY』30号 64-66頁

ダイアモンド J.［倉骨彰訳］（2000）『銃・病原菌・鉄―1万3〇〇〇年にわたる人類史の謎―（上・下）』東京：草

思社
ダイアモンド J.［楡井浩一訳］（2005）『文明崩壊―滅亡と存続の命運を分けるもの―（上・下）』東京：草思社
中沢新一（2004）『対称性人類学―カイエ・ソバージュⅤ―』東京：講談社
日高敏隆（2007）『動物と人間の世界認識―イリュージョンなしに世界は見えない―』東京：ちくま学芸文庫
ヒューズ J. D.［村山聡・中村博子訳］（2018）『環境史入門』東京：岩波書店
三宅和朗（2019）「日本古代の心性史と環境史」『二〇一九年度三田史学会大会報告要旨』
ユクスキュル／クリサート［日高敏隆・羽田節子訳］（2005）『生物から見た世界』東京：岩波文庫
ラトゥール B.［川村久美子訳］（2008）『虚構の「近代」―科学人類学は警告する―』東京：新評論
ラトゥール B.［伊藤嘉高訳］（2019）『社会的なモノを組み直す―アクターネットワーク入門―』東京：法政大学出版局
レンフルー C.［溝口孝司・小林朋則訳］（2008）『先史時代と心の進化』東京：クロノス書店

〈英文〉

Bradley, R. J. and Williams H. eds. (1998) *The Past in the Past: The Reuse of Ancient Monument: World Archaeology Vol. 30, No. 1*. Abingdon: Routledge.

Gell, A. (1998) *Art and Agency: An Anthroplogical Theory*. Oxford: Clarendon Press.

Hanley, T. B., Rossano, M. J. and E. P. Kardas eds. (2019) *Handbook of Cognitive Archaeology: Psychology in Prehistory*. New York: Routledge.

Harris, O. J. T. and C. N. Cipolla (2017) *Archaeological Theory in the New Millennium: Introducing Current Perspectives*. Abingdon: Routledge.

Hodder, I (2012) *Entangled: An Archaeology of the Relationships between Humans and Thing*. West Sussex: Willey-Brackwell.

Hodder, I. ed (2012) *Archaeological Theory* (*Second Edition*). Cambridge: Polity Press.

Lindstrøm, T. C. (2015) Agency 'in itself'. A discussion of inanimate, animal and human agency. *Archaeology Dialogues,* 22(2): 207–238.

McNeill, J. R. (2003) Observations on the Nature and Culture of Environmental History. *History and Theory*, 42: 5–43.

Olsen, B. (2003) Material Culture after Text: Remembering Things. *Norwegian Archaeological Review*, 36: 87–104.

Olsen, B. (2007) Keeping Things at Arm's Length: A Genealogy of Symmetry. *World Archaeology*, 39: 579–88.

Olsen, B. (2010) *In Defense of Things: Archaeology and the Ontology of Objects*. Plymouth: Altamira Press.

Olsen, B., M. Shanks, T. Webmoor and C. L. Witmore (2012) *Archaeology: The Discipline of Things*. Berkeley: Univer-

sity of California Press.
Olsen, B., and C. Witmore (2015) Archaeology, Symmetry and the Ontology of Things. A Response to Critics. *Archaeological Dialogues*, 22(2): 187–97.
Urban, P. and E. Schortman (2019) *Archaeological Theory in Practice* (*Second Edition*): New York: Routledge.
Webmoor, T. (2007) *What About 'One More Turn after the Social' in Archaeological Reasoning? Taking Things Seriously. World Archaeology*, 39: 563–78.
Webmoor, T., and C. L. Witmore (2008) Things Are Us! A Commentary on Human/Things Relations under the Banner of a 'Social Archaeology'. *Norwegian Archaeological Review* 41: 1–18.
Witmore, C. L. (2007) Symmetrical Archaeology: Excerpts of a Manifesto. *World Archaeology*, 39: 546–62.
Witmore, C. L. (2014) Archaeology and the New Materialisms. *Journal of Contemporary Archaeology*, 1: 203–46.
Worster, D. (1988) Doing Environmental History, in Worster ed. *The Ends of the Earth: Perspectives on Modern Environmental History*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 289–307.